





花

卷下

山々此帯や不中けて室の空  
鼻紙に以さるとこれ多し  
物さ一都れ流きとわかきて

危然  
汎厄

○余中吟

蓮二坊

柳陰多し如海危の法多し  
馬の心りれ門を苗代  
棧に如海裕に衣も紐よりて

持法  
遠支

○立秋

里紅

故き如中少年多し  
今朝冬固扇も以らぬ

海臺

のそかひ松戸よ自の終り居て 持塚

石録

寫れ子も知恵はくや均り美 遠支

給被着ふくも芋やうく見れ 持塚

藤のまや首ふけ小咲浪のと 摩山

ふくふに山き日のち 以古こ川 海童

寫やよ習沢く窓の梅 箕由

有芝居の品まや美濃の 暁凡

笠松連中

神祇

櫻咲お流や神の仮不帯 遠支

島の標の取く繪と多れ 右丁

奥原をまればかさ流着あれて 危徳

秋教

萬にやうくよ部や谷乃坊 桐岳

山き流しにむらあまの倉 遠支

筆箋にな良の互御もか代く 右丁

恋

侍育れ子多満いよまきと石川 摩山

物あふにき月よりも闇 桐岳

栗林に山の仮正洲あくあ免て 遠支

五常

腰かけ交母や朝顔又藤の夏

海童

海次の鳴子に娘の巾着はれ

摩山

月おにも市れ房りを侍兼て

桐岳

懐旧

婉柔や佐藤庄司の山屋夜

楚瑤

野分静まなす川に菊

海童

一副毛の冬に夕の跡り居て

摩山

旅

大石も旅麻院てや一雨酒

其由

狂舟に鳴と山や雪よ次

楚瑤

松原を繪にもかきし原の色にて

海童

雪

紫賣に短冊つけん雪れ雪

訖瓦

伊達洲も餅搗のささ

其由

食村は朝露のふと志られて

楚瑤

月

石目や雪うを舞や福のうへ

危然

厂も狂じよと架海さく波

訖瓦

お小僧もお撲の連をやりて

其由

新加納連甲

其一

若竹の月を舞見や杯の光

如耕

麦畑ありて 庭の帯目  
尺八に踏き里からかよひまゝ  
侃如  
不系

其二

古海村の伊達にもろく  
草狩寒より 祖の帯串  
如栞  
侃如

其三

草刈の巻からあてや 鳴雲雀  
侃如  
不系

石録

鴨の舌ありき 海や 谷乃梅  
侃如  
不系

○旧會

旅しよおやも 少はや 虫の声  
江小坊  
純子に 訪海秋の个ぬし  
遠二  
二千里も 一里も 何れも 目を見て  
右毫

石録

初午に 此より 冬まじ 園子が  
童平  
雲井から ういむと 一の 益姉川  
吏前

我朝を楯に和なく牡丹  
姫百答も世に渡りや世極子  
光陰もふかき時ゆりあうる  
堂大れ橋にも云う海大鏡  
元山と雪れ下繪やうの月  
竹枝も浮遊る野山のにま  
牛心也川枯枝りも海野系  
蛤の口生や丸も海叢の那  
寒梅や東屋に霜の柱之  
夢の思うをいせ屋根の冬丸  
梅因

秋石

初てさへ角をさうる麻の戸

草狩の口冬家も大を焼  
多胡

月れ五の晴に雪隠の戸あて  
童平

冬尾

一蓮の傘に化生れやお  
早島

紙衣に衣とよらと襟つま  
杜竜

ささなうに穀の小岩を借て  
童平

冬右

山心也川先を海にや  
御太

雲によほきし一夏の麦苗  
槐二

尻はり海流よ禱の住家とて  
童平

○旧會

床の音や友にもきかぬ枕

素女坊

中戸中と戸れ間と甲波

童平

年にも目を見ぬ留れ目書て

吏前

春右

傘張の世帯を輕く首はむけ

水胡

女禰と取く垣乃山次

吏前

か代冬帯から先衣別添て

童平

友尼

襟冬園子に冬の暗着るか

呉井

着代涼しき襦袢、朝起

早島

大工流冬取用ふに傘提て

童平

夏右

扇に猶念の入き季ふく暑

吏前

仕母の馳走にむき若敷屋

梅因

猫より冬子しに童アれ返りて

童平

友尼

槐二

か智れ桂男や 浮々乃月

紅紫の川ち海庭の帯目

呉井

草袴冬下履友から河のむまて

童平

石録

寫れ葉に冬よりや 藪の孫

伯机

糸冬まゆのほろと物のまれば  
糸雪  
以もつふ害や一し一し麻の戸  
有琴  
早し女中以しくはよ安くも田植川  
素凡  
初雪や顔のわさけをゆり舞  
女小佳  
闇をかり思へ古久良の川をむし  
琴凡  
山糸まも紅粉子次霜の薄化粧  
仲志  
凡よ実も入寸糸れと見じ  
呂柳  
疎もおてほむや若葉れ肉留  
文可  
昼から冬初て見えとも海様に  
若鳥

波阜 連中  
春丸

糸几子乃初附前のるり  
梅岡  
美日雨を甘ま庭の白染  
侍太  
兵服屋もほろ冬雛と有ひまて  
童王

其十

鶯の子冬と雪ありや神の留守  
有琴  
小美の花の木にも草にも  
梅光  
御宇から高雅へりあもあゆまて  
霜鳥

○晴鳥言文墨閑

折結次渡唐の梅の墨繪川  
童平  
夜と隠れまいようふいと  
有琴  
如葉屋から小船釣りや橋うけて  
蓮二



享保九年正月十日

享保の發を況して

泊帆

髪重也十日れ月れ小判

冬頃からに舞も惣所

尾子

幕目れ波り家鴨を控え

凡子

館百真

雷多毒

籠物よりあむく障や床の声

窓に夜寒の月又慙立

素足

田舎に冬は寒もあつて

以琴

其六

琴凡

初級やうわく爰も中音

あとい言れ十平仙を粗撰集の  
面観に似通るく波のうに況示  
と海を正凡の地の緒古のにて  
階子かゝに居根あつたの續のて  
ま流りほりゆ原曲せもあつて定か  
かゝきいり一巻扱もの巻に  
あらなやうに生へて返くも  
あり世にからに付教諭と厚  
か季りれはも芳忠に昔一  
とせあつてあり

一筋もつらなき高れ枝の那  
味一多光りと露一海夕月  
か学人に伯父のよしの書して  
通じしと高に見地海筆紙  
銀座しとま正面を海向じ店  
小海寺りり店多し東部を  
旅人に物教するも丁寧さ  
糸と切多ありかしくさ  
吹癖のたき尾をとかい込めて  
生垣のうらまをせ竹藪  
祇園中しひあうし海平屋のわたき又  
取持の青い縁小相もん

浪浪和り打から番乃生とあが  
麗サもよふ巻さきてこのと海  
自乃おに信山の端あふな季  
巻も巻けふ志ほりれと掛り  
つぎあふけれや流しがいきの  
まてゆか梵字のナク小平一首  
観音堂の妙かじもふかう  
松松の小暗にやると米の葉へ  
きびんの余雪鳥と琴弾り  
白酒に嫁も娘と酔がとや  
切し道多れやと金屏乃思

江山景のありし由緒のゆれはらば  
春よ記にき 権くゝあるる  
跡きりもあつた 舟ももた遠  
登りやるれき 舟ももた遠  
のじりこゝを 髪のはら目立之  
松ぶら子れ 泣かして 念止さ  
裏町き 市の日 堂ても 釋おな  
琴 三味線も 物物おやりの  
活き 勃つがりて ぬじさ、ま  
年判は ぬて 尚和おき 海、  
ちや 成の出よから ちれ月が 見一  
一、 活して 渡か、り 里か、り

五十音

ふたつ目の

しつぱん

おひ

眼の

ふたつ目の

ふたつ目の

ふたつ目の

ふたつ目の

ふたつ目の

ふたつ目の

ふたつ目の

ふたつ目の



のりあまのりよ 深澤 研易の

此を懐じる 悟の文章

質の四方もなまらや 流れる前

目海見か ことわりのあつた

知角角と一統 養ぬりのあし

事のちよよ ありとあり

い嬉しく 流れる又とあり

い ことわりのあつた

か ことわりのあつた

か ことわりのあつた

竿の洗濯もあつた 子とあり

ま ことわりのあつた

掛とる 舟の書か ことわりのあつた

草のあつたの ことわりのあつた

反

反

反

反

反

反

反

反

反

反

反

反

反

反



世つゝあし約

あし

忘まののしるの逢申の

あしあしあしあし

あし

あしあしあしあしあしあし

あし

あしあしあしあしあしあし

あし

あしあしあしあしあしあし

あし

あしあしあしあしあしあし

あし

あしあしあしあしあしあし

あし

あしあしあしあしあしあし

あし



風雅... 故の... 命  
... 命

晩... 命  
... 命

... 命  
... 命

... 命  
... 命

... 命  
... 命

... 命  
... 命

... 命  
... 命

妹の書入れ部 毎  
くさくさ 十者 一と 田示  
いね ちさく 一と 一と 一と 一と

船目と遠く 野のまき 一と  
運 一と 一と 一と 一と 一と  
川 一と 一と 一と 一と 一と

川 一と 一と 一と 一と 一と

田畑 一と 一と 一と 一と 一と

意匠のまじ 追剥 一と 一と 一と

一と 一と 一と 一と 一と

あつ 一と 一と 一と 一と 一と

一と 一と 一と 一と 一と

水 一と 一と 一と 一と 一と

一と 一と 一と 一と 一と

一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と



七月

あし約

初秋や

初秋の

湯

影

かく

湯

ふん

初

あし

素

廣

孫

郁

石

毫

肥

くはあ〜の店〜の店〜の店〜

女〜の店〜の店〜の店〜

物〜の店〜の店〜の店〜

力〜の店〜の店〜の店〜

一〜の店〜の店〜の店〜

一〜の店〜の店〜の店〜

人〜の店〜の店〜の店〜

琴〜の店〜の店〜の店〜

高〜の店〜の店〜の店〜

長〜の店〜の店〜の店〜

路〜の店〜の店〜の店〜

路〜の店〜の店〜の店〜

漢〜の店〜の店〜の店〜

漢〜の店〜の店〜の店〜

必

牛

竟

鹿

全

竟

竟

全

竟

全

竟

牛

必

必





教かきしき 再婦り 復小次

又月無き 山内門の内 記

か代り 是 更言 意 乃と 解 安水

おのり 衣 衣 袖 籠 お 多 現 陸

この 教も おしき 一 節 山 水 記 尾 尾

さき 一 多 糸 地 女 け ち 多 備 丸 下



新後之まゝも徳り

花

月か——まゝおつり

全

おまゝの目御おほく

花

おまゝのまゝもまゝ

花

おまゝのまゝもまゝ

花

おまゝのまゝもまゝ

おまゝのまゝもまゝ

おまゝのまゝもまゝ

おまゝのまゝもまゝ

おまゝのまゝもまゝ

おまゝのまゝもまゝ

おまゝのまゝもまゝ

鳴る水邊の舟。又か帆が重

生ふ水にがら曲突の下

さびしや高橋を舟も鳴

る響もさうの響くのりさ

千石の材物多しけり豊後守

又字もつかりの柱も多

花

花

花

花

花

花

年おなじみの所成さきさき

何れ舟をくし悔さ死さ

旧きより古風な早や中本道

親類もあはれはゆりしれ

此も古き切もさ切は花さ

唐子と蔵しに神はさり

花

花

花

花

花

花

山に  
年々  
身  
らん  
同  
又  
膚

徳  
花  
今  
也  
凡  
毎  
山

出入  
出  
入  
名  
有  
相  
候

縁  
字  
之  
年

一 為もあふ 船のく 陸のぬ  
もも 朝の 露のく 光むきの  
後々 地も 所 ぬあ ちま ち  
と ぬぬ 光ま ちの ぬぬ のま ぬ  
ゆ ぬぬ けぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ  
ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ  
ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ ぬぬ

ある二つ 巻の ぬぬ ぬぬ

うらなひをたづねてのりあつたして 程う申  
ひりくくとあはれもの 二匹をいふ  
人のいふ言に解いてはるるに  
ゆるしにたつたつたに日えり  
さきくさつた身をさかしてさき  
さきのいふ言にたつたつたに  
たのほひ又 二匹をいふもの  
のりあつたつたにさきくさつた

そのおのりよりたつたつたに  
あつたつたにさきくさつた  
ゆるしにたつたつたに

ゆるしにたつたつたに  
あつたつたにさきくさつた  
ゆるしにたつたつたに  
あつたつたにさきくさつた

百病

晴月八日會始

枕邊會

枕邊會の百病を治す

石  
石  
石  
石  
石

石  
石  
石  
石  
石

石

石  
石  
石  
石  
石

石

石  
石  
石  
石  
石

石

石  
石  
石  
石  
石

石

石  
石  
石  
石  
石

石

石  
石  
石  
石  
石

石

石  
石  
石  
石  
石

石

石  
石  
石  
石  
石

石

月影に花の影をまじりて  
 花の影をまじりて  
 月影に花の影をまじりて  
 花の影をまじりて  
 月影に花の影をまじりて  
 花の影をまじりて  
 月影に花の影をまじりて  
 花の影をまじりて  
 月影に花の影をまじりて  
 花の影をまじりて

花の影をまじりて  
 月影に花の影をまじりて  
 花の影をまじりて  
 月影に花の影をまじりて  
 花の影をまじりて  
 月影に花の影をまじりて  
 花の影をまじりて  
 月影に花の影をまじりて  
 花の影をまじりて  
 月影に花の影をまじりて



遠く回して一何場のなかに中冬松  
 せら〜ふゆの余念は云々秋  
 藤花あはれむ甘き房の別しう糸  
 山〜ゆらむ縹子の上帯  
 花〜ら露出ス雨の晴上り  
 舟送るそのも敷の雲と馬  
 江舟印ふごうと〜舟員が有りの  
 文治

二里ふら〜いをな河の下り坂  
 着て〜し梅氣斗りしと押しん  
 家かまに信原心お袋  
 世の中の子言曲と別るもの音  
 瘧〜あらのたみ肥尸猫  
 月影と梅下述〜さ〜入〜  
 秋海棠の紅と梅割  
 和江画仙〜人〜碎  
 号松

出代とはよと陸奥の始る  
 仲人きりまじりたる今昔  
 扣虎の海の出るく膝の上  
 二年月かゝる極るお母子  
 寺流の口那やそまはる徳  
 いつこまらぬなるる唐唐  
 着る今よそ義の月のこや

路 着 柿 紅 白 全

園きりく汗をいませ  
 おあひきりたる氣骨は折る  
 在おと今たる文のそ縁で  
 緝絡のそあといふ方ふそ  
 既せといふる廊通心  
 若る人書とと有るは是は花  
 経論中は琴と弾る

路 江 紅 白 冠 栄 碑

石波名。余の程可い定るく  
賞らあせり。河造、米  
ま帰るく。後領の子と。是所  
指ぐ。あやと。あぐ。あを。あ  
生垣。し。年。分。取。く。一。海。合  
し。年。分。取。く。一。海。合  
今。金。錢。の。融。通。が。あ。る。が。あ。ら。う。ら

和 希 踏 功 栄

お。條。の。屋。あ。ら。う。の。取。ま  
測。と。海。と。川。ふ。ら。う。の。あ。ら。う。ら  
山。と。名。の。と。観。見。の。あ。ら。う。ら  
讀。ま。う。と。あ。ら。う。の。あ。ら。う。ら  
土。番。山。屋。の。條。と。取。り  
月。と。名。の。あ。ら。う。の。あ。ら。う。ら  
林。と。名。の。あ。ら。う。の。あ。ら。う。ら

全 生 磁 宗 希 全

舟通つて秋意を感ず新雨  
春はあふらる胸の呼吸  
高き山の波の静と帯りま  
まら月立ちく松系の花  
秋意を感ず時々の秋意を感ず  
ひんかおちる糸のたふさ  
志つと志く舟の静を感ず

和川画江口日松

宿心子の波の静  
いつ迄も石の多き橋を感ず  
権系及の春の静  
目と操と祈詔不結く書  
切り刻み志く舟の静  
朝日と花の静と格別不  
苗代時と花の静と色

芥碑呂全牛踏江

暇に次先しふ道ありき  
持之舟の備し余程わ  
余宵より遠ふ真の夏  
孝の中しは落くはる  
唐の言ふしおらぬは日本  
君に代る臣に代る  
打あらしは男の子は

仙 和 界 同

怪の色こまふ 包しふ  
おるの内と志づく松がり  
我等の道はせしき意  
為持と裁て内老の二三人  
はまふら有難く程な  
さぶぐんさふし城の月あり  
中箱の落し中を並

碎 日 袖 和 牛 江

流くこまき舟仕廻が角刀立  
 悟心隠舟の負の鐵巻や  
 有松の木の袖に巻く巻合  
 後浪の波の波の波の波  
 入道の向ふ山夕紅  
 冥土の土の土の土の土  
 さらさらの風のとまりの暮  
 山柳 山柳 山柳

十一才二

五十韻

小文心

何  
み  
か

暖ふし

竹馬の物く

中

あ

竹

ふ

後

ふ

あ

あ





旅もあつた旅の末に樂平に

絹衣を着るまき好海也

法も家まは又いふと音あて

張りと多もぬさくの江戸

とふく事見れ世の中

根沙は小海に山あうせ

世に義理もいふもあつた

志

景 并 全 茶 忍 糸 忍

おもしろやうに遊ばしむ

苑

味也にありて雨の人はざり

羊

重くしてこれなほ忍

苑

噂のあつたあつた喜子と

大

共盡してとて重くして

雙

お波名や月えり今の子を

中

福の言入る命

苑

毛見の沖より志中へ下りて  
袴の巾にさきさきなる  
八間き九つをさく思ふ  
はるかに入るの 後湯  
先子に杖に座臥し  
古に相尋と我もの  
流れ月と日待て  
山

る果ての  
後



茶の香もあつたに色もあつた  
霞の香もあつたに色もあつた  
霞の香もあつたに色もあつた  
霞の香もあつたに色もあつた  
霞の香もあつたに色もあつた  
霞の香もあつたに色もあつた  
霞の香もあつたに色もあつた  
霞の香もあつたに色もあつた

二

白くもやむらしたる月  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた

赤い樹もあつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた

二

あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた  
あつたに色もあつた











わが事柄の一年々あつて

お島ふもつ家へ入居の御し後  
若し山向ても旅の御し後  
まの村の地味も御し後  
まの村の地味も御し後  
御し後

御し後  
御し後  
御し後  
御し後  
御し後

御し後  
御し後  
御し後  
御し後  
御し後

御し後  
御し後  
御し後  
御し後  
御し後

御し後  
御し後  
御し後  
御し後  
御し後

御し後  
御し後  
御し後  
御し後  
御し後

おのゝのりゝをきかぬのこ  
肌をくゞぬしのあかきとぬかき  
あかきとあかきと仰を戴く  
七轉らハ花とらふひく  
ツヅクくの名をきく時め

とくゝと流しゝくねくあかき  
言をきくゝ年と流るひまを提を  
望人たのよとたあゝゝゝん  
え送しゝゝゝハちよのあかき  
候ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あかきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
温とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あかきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちのあかき中ゝあかきとあかき  
あかきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あかきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あかきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あかきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あかきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あかきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あかきゝゝゝゝゝゝゝゝゝ



